

東海の古代

第264号 2022年8月

会長 : 畑田寿一
 編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : toukaikodai@yahoo.co.jp
 HP : http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm

日本列島の土器と鉄

名古屋市 石田 泉城

1 通説の鉄器伝来

日本の縄文時代は、鉄器が存在せず、弥生時代になって半島や中国沿岸から鉄器文化、製鉄技術が日本に伝わったとされ、青銅器とともに鉄器がほぼ同時に流入したと一般的に言われています。

一説に、鍛冶の技術が伝来した時期は、紀元前3世紀頃で、主な伝来ルートは、次の3ルートとされます。

- ①朝鮮半島から九州北部に伝わった弁辰鉄資本ルート（ニニギ族）
- ②朝鮮半島から山陰地方に伝わった大陸産鉄族ルート（スサノオ族）
- ③中国沿岸から九州熊本地方に伝わった海辺産鉄族ルート（アタ族）



また、一方で、日本で本格的に砂鉄・鉄鉱石から鉄器を製造出来るようになったのは、6世紀の「たたら製鉄」からとし、鉄の生産が始まる前までは、大和政権が朝鮮半島南部の鉄を入手し、それを一括管理し、鍛冶工房で加工して各地の豪族に配布していたとする大和一元史観に基づく説もあります。鉄鉱石を還元製錬して炭素含有量が少ない銑鉄や製鋼を作る製鉄の技術が無いために、1次加工した鉄を海外から仕入れ、それを2次加工する技術だけがあったとします。たたら製鉄の遺跡は、主に中国地方を中心に北九州から近畿地方にかけて徐々に日本各地に広がり、近世までたたら製鉄は続いています。

紀元前3世紀の時点で日本に海外から鍛冶技術が伝わったのか、成形の技術だけが伝わったのか、両説は基本的な考えが大きく違いますが、いずれにしても製鉄にかかわる技術を海外から取り入れたという考えは同じです。

2 土器作りに恵まれた日本列島の環境

日本列島では、16,500年前の土器が発見されています。世界の土器の年代がいずれも数千年前ですから、それと比較して日本列島の土器は段違いに古く、縄文時代には、その土器で作物を調理、貯蔵するなど世界最古の土器文化が花咲いていました。黄河文明といえどもせいぜい紀元前4,000年が起源です。

要するに、日本列島は、古くから土器を焼くために火の使用が進んだ「火の先進地」であり、その最古の土器の一つが、青森県東津軽郡外ヶ浜町にある^{おおだいらやまもと}大平山元遺跡から出土した無文土器の破片です。ちなみに同遺跡から出土した石鏃も世界最古です。

また、東京都武蔵野市の御殿山遺跡からは、旧石器時代の技法を色濃く残す石器類とともに、16,000年前の無文土器の破片が発見されています。

さらに、新潟県十日町市の笹山遺跡から出土した火焰型土器は、13,000年前のものと同様に、佐世保市瀬戸越町の泉福寺洞窟からは、12,000年前の豆粒文土器が出土しています。

いずれも「炭素14年代測定」の科学的手法で裏付けされており確からしいといえます。

縄文土器の独特の形については、『縄文土器の研究』（小林達雄、学生社、2002年）によれば、すでに慣れ親しんでいた編籠や樹皮籠などのフォルムを真似たものとされており、私も同感です。その上で本物に近づけるべく縄目を付けて装飾したと考えています。

この縄文土器は、低温の野焼きでしたが、それを釜と炭を利用することで高温焼きの技術を獲得し、厚みの薄い弥生土器を作られるようになったのは画期的です。フイゴなどで炭に送風することによって1000℃程度の高温が得られることを発見したのです。

日本列島においては、花崗岩の風化によって生じる粘土を手に入れるのが容易であり、粘土を捏ねる水も豊富です。また土器を焼くための燃料となる薪を産出する森林資源も豊富であり、日本列島が土器作りにおいて世界の先陣となったのは、このように土器作りのための条件に恵まれていたことにあります。

日本列島では、世界に先駆けて土器作りが進化し、その際に得られた高温焼きの技術が鉄器づくりに繋がったと考えられます。

3 鉄器と変態温度

鉄を溶解するには3,000℃ほどの超高温が必要であり、それは弥生時代より以降の後世の技術を待たねばなりません。700℃以上の変態温度が得られれば、鉄は赤く熱し、鍛冶によって不純物を取り除くことができます。

弥生土器は、1,000℃の高温で作られますから、その温度はとりもなおさず、鉄作りに繋がります。つまり、鉄の精錬が可能です。

したがって、土器作りと製鉄は、高温の火の獲得と大いに関連し、弥生時代には、鉄作りができる条件が整っていました。

事実、1979年に、福岡県糸島市にある曲り田遺跡から、紀元前10世紀の鉄器（板状鉄斧、3cm×15cm×4mm）が発見されました。

曲り田遺跡で発見された鍛造の板状鉄器は、弥生時代最古の土器である夜臼^{ゆうす}I式の段階に属する住居跡から出土しているため、はじめは大陸や半島からの流入品と想像し、土器編年から弥生時代が始まる紀元前4世紀頃のものとしていましたが、国立歴史民族博物館による弥生時代の時期の前倒しとともに、2003年の炭素14年代測定の結果と合わせて、紀元前10世紀ごろに作られた鉄鉱石原料の鍛造鉄器と判明しました。

紀元前10世紀は、まだ大陸や半島では鉄器が製造されておらず青銅器の時代ですので、

通説のように鉄器の文化が海外から日本列島に流入したとはいえないようです。

4 地上炉による精錬

たたら製鉄以前の製鉄遺跡としては、壱岐の**カラカミ遺跡**の地上式炉の例があります。鉄器を作るため床面に直接炉を作る地上式炉が7基確認されており、鉄器の原材料である板状鉄斧や鉄鎚のほか、炉に風を送る管や鉄の棒、鉄の鍬なども出土しています。

また、紀元前6世紀からの原の辻遺跡では、鎌、鋏、鋤など農業用を始め鉄鍬や鉄剣などの武器のほか、工具や漁撈具など様々な用途の鉄器が300点以上発見されています。

さらに、対馬海峡を渡った朝鮮半島南部の**勸島遺跡**からも同様に鉄器製作用の地上式炉が数多く発見されており、ここでは弥生系土器が大量に発見されています。

また、鉄鉱石の産出地としては、朝鮮半島の蔚山市の**達川遺跡**があります。ここにも、倭人の痕跡があり倭人が居住し生活していたと考えられます。このように対馬海流を挟んで朝鮮半島南部から北部九州にいたる地域は、紀元前における倭人の製鉄技術の中心と考えられます。



5 製鉄技術の伝播説

福岡県の曲り田遺跡（糸島市）、板付遺跡（福岡市）、石田遺跡（北九州市）、佐賀県の菜畑遺跡、東畑瀬遺跡、石木中高遺跡、熊本県の斎藤山遺跡などで縄文晩期末から弥生早期の突帯文土器に伴う水田や鉄器の発見、さらには鉄器使用の痕跡が確認され、弥生時代は農業と鉄器の文化と考えられています。

ただ、北部九州の遺跡から大量の鉄器が見つかる時期は、弥生時代の前期末から中期にかけてであり、10世紀の水田農耕の始まりと鉄器の出現は一致しないとする説もあります。

しかし、菜畑遺跡では、水田に打ち込まれた大量の杭の鋭い先端の加工痕が鉄器によるものと判明し、弥生時代早期の鉄器の存在を覗かせます。

鉄器先進地とされた中国東北部ですら鉄器は、紀元前5世紀ごろにならないと出現せず本格的な使用も紀元前3世紀のため、紀元前10世紀の北部九州に製鉄技術が伝わるはずはないという認識でしたが、製鉄技術は大陸や半島からもたらされたとする伝播説に固執しなければ、先に掲げた北部九州の遺跡は、通説を一挙に崩すことになるのです。

古代鈴鹿山系の鉱山と神社

一宮市 畑田 寿一

近江と美濃の中間点の伊吹山の東南に南宮大社がある。この神社は金山彦命を主神として鉱山・鍛冶に携わる人々から崇拝されており、毎年11月に行われる「ふいご祭り」には全国から参拝者が訪れる。しかし、この付近はおろか、鈴鹿山系において古代まで遡る鉱山跡は発見されていない。

今回は今まで開発された鉱山や周辺の神社、この地の古墳・遺跡など動向から鈴鹿山系における古代の鉱山の可能性について眺めてみたい。

1 鈴鹿山系の地形

三重県四日市市史に依れば、鈴鹿山系は次の経過を経て出来上がってきた。

鈴鹿山系は石灰石と花崗岩を主体とした山が多く、ここで採れる鉱物資源は1億数千年前のマグマの上昇によるものと考えられている。マグマの上昇の際に各種の金属が湧出し、スカルン鉱床を形成した。

年代	地層の形成
数億年前	この地は海の底で、石灰岩、砂岩、チャート層などによる秩父古生層が形成された。
2億年前	褶曲と隆起が始まって陸地化した。
1億数千年前	マグマの上昇により花崗岩は造られるとともに花崗岩や石灰岩の割れ目に種々の鉱物が嵌入された。
2千年前	長野県南部から広島県西部に渡る古瀬戸内海が形成された。
500万年前	豊橋付近から尾張、伊勢湾に至る巨大な東海湖が形成された。
100万年前	鈴鹿山系を南北に走る一志断層ができ鈴鹿山脈が形成された。

(出典：四日市市史に筆者が加筆)

2 鈴鹿山系での鉱山の歴史

(1) 鉱物資源

今までに開発された鉱山を眺めてみると、金、銀、銅、鉛、水銀、鉄など、古代人から見て貴重な資源が採れていたことが分かる。しかし、いずれも埋蔵量が少なく鉱山として長続きしなかった。

しかし、治田金銅鉱山は16世紀に徳川家の天樹院千姫が本田家に輿入れする際に化粧料として持参した他、大正に入り大阪経済界の五代友厚氏が鉱山開発を行うなど歴史も古く、一時は国内でも有数の出鉱量を誇る程であった。



(2) 製鉄精錬遺跡

大垣市赤坂にある金生山は石灰石の山であるが、上層部に鉄鉱石があり、昭和初期まで採掘が続けられた。元三重大学教授の八賀晋氏は、この鉄鉱石の分析に深く関わっており、同氏の報告によると、付近の遺跡から発掘された刀子は金生山の鉄鉱石で造られたものであるとしている。

また、南向大社付近では弥生時代末期に百済系伊福部氏（本貫地：伊吹山南麓）を中心とした勢力が日守遺跡付近で製鉄か鍛冶を行い、その後、この勢力が各地に広がった結果、鉱山・鍛冶業関係者の総本山となったと考えられている。しかし、証拠が遺跡から発掘された鉄滓しかなく、時代の特定など課題が多い。

彦根市の稲部遺跡（3世紀中頃）からは鉄鍛冶跡が23棟発見されており、鉄器も6kgに及ぶ。卑弥呼の時代、全国でも最大規模の鍛冶工房が存在した。

3 神社

（1）多賀大社

多賀大社は鈴鹿山脈に源を発する犬上川が琵琶湖に注ぐ位置にあり、鈴鹿山系への西側の入り口でもあり、鞍掛峠を経て伊勢へ通ずる道への出発点でもあった。神社は現在ではイザナミ・イザナギ命を主神としているが、過去には犬上氏を祀っていた。犬上氏はアメノヒコボ共に渡来した豪族であるとされている。北西の湖岸の彦根城がある彦根山の名前は、製鉄・鍛冶の神の天津彦根命に由来しており、多賀神社も鉾山に所縁がある神社であった。

（2）南宮大社

前述のごとく鉾山・鍛冶業を営む人々の信仰の中心地であるが、神社が示す由緒については歴史的な証拠が薄い。しかし、息吹、息長氏など製鉄・鍛冶を想定される氏族が中心人物であり、鍛冶以外の製鉄に関わっていた可能性は高い。

（3）多度大社

鈴鹿山系の東側にある多度神社は、主神に天照大神の3子「天津彦根命」を祀るが、その子の天目一箇命も祀っている。天目一箇命は製鉄・鍛冶の神で鈴鹿の南東の出口を守るに相応しい神である。神社が祀られている多度山は伊勢湾に出入りする船にとって目印でもあり、ヤマトタケル伝説では「尾津前」として登場し、美濃と尾張を結ぶ拠点であった。

4 古墳

（1）稲部遺跡

前述のごとく3世紀中頃の遺跡で、180棟の竪穴式住居と23棟の鍛冶工房跡が出土した。遺跡は纏向遺跡に匹敵する規模であり、2世紀の近江の伊勢遺跡と同様に、ヤマト北東部にもヤマトに匹敵するほどの勢力を持った独立勢力が存在したことが伺われる。場所が鈴鹿山系から流れる愛知川沿いにあり、今回の主題の鉾山との関係が注目されるが、証拠が不十分であり断定は難しい。

遺跡からは東海、北陸（敦賀）、山陰の土器が出土しており、琵琶湖を利用した交通の要所としての役割も果たしていた。

（2）山津照神社遺跡

稲部遺跡の北方3kmに位置し、十数基の古墳群の中の盟主的な存在で、4世紀末の前方後円墳（124m）である。古墳の形状は纏向型古墳に分類され、ヤマトとの関係の深さを示している。時代的には息長氏の勢力が増大しつつあった時期であり、日本海、ヤマト、東海を結ぶ重要拠点であった。

（3）牧田古墳群

南向大社の付近に存在する6世紀頃の古墳群で、この地方豪族の墓と考えられている。前述の日守遺跡と同様に南向大社を中心とした製鉄・鍛冶氏族が存在したと考えられているが、出土品からは明確なことは言えない。

5 まとめ

以上、断片的な資料を集めてみると、次のような仮説を挙げることができる。

- ① 古代の鉾山が存在するとすれば、鈴鹿山系の中央にあたる御池山付近が最も可能性が高い。ここからは金銀銅などが産出した。古墳などが愛知川沿いに展開することから、採取した鉾物は琵琶湖の彦根市付近からヤマトに送られ精練された。
- ② 注目すべきは水銀で、大量に算出したのは伊勢神宮付近であるが、いなべ市付近から

も産出した。丹生の地名は北部の醒ヶ井付近にも存在するが、発掘箇所が見つからないのでベンガラであった可能性が高い。

- ③ 石樽峠付近から産出した「螢石」は古来から「夜明珠（イエミンジュ）」として珍重されており、古代は九州の阿蘇山付近しか産出していなかったため、この地の物が古代まで遡れば、交易の観点から歴史的に意味が深い。
- ④ 鈴鹿山系の3つの出口には鉾山に関する神社が存在する。いずれの神社も創建が明確でない程古く、ヤマト王朝との関係が深いことから、古くから鉾山の開発に関わってきたと考えられる。
- ⑤ 関係する豪族の中で「息長氏」の動向が最も注目される。本貫の米原市を起点に、伊吹山山系の鉄鉾山の開発、金生山付近（大垣市）の製鉄・鍛冶、美濃の関市の刃物産業の基礎を作り、美濃・尾張地方の鍛冶に大きな影響を与えた。

中国側は倭と日本をどのように理解していたのか

東海市 大島 秀雄

1 はじめに

7世紀の倭と日本に関する中国の正史の記述は変化に富んでおり、倭と日本の2国が列島に同時期に存在していたのか否かについては諸説がありますが、その他の点を含めて中国側がどのように列島の歴史を理解していたのかについて思うところを述べてみたいと思います。

2. 倭と日本が同時期に存在していたのか

『新唐書』日本伝では国王の姓は阿毎氏で、初代日本国王を天御中主とし、神武の時に天皇と呼ぶようになり、都を筑紫城から大和州に移したとなっています。一方、『旧唐書』日本伝では日本国は倭国の別種とし、あるいは日本は古くは小国なれども倭国の地を併せたと記され、また『旧唐書』には倭国伝の項もあることから、あたかも2国が同時期に存在していたかのように読めます。

これは、10世紀に編纂された『旧唐書』から11世紀に編纂された『新唐書』の間の約1世紀の期間に、7世紀の段階で日本列島が初めて統一されたという新事実が中国側によって発掘されたということの意味しているのでしょうか。

列島側の史料からも、とてもそのような事実があったとは思われません。

すなわち、筆者が「東海の古代」第261号の「秦王国について」で述べたように、『隋書』の阿每多利思北（比）孤とは普通名詞の「天足彦」のことで、『新唐書』では用明天皇のこととし、『宋史』では聖徳太子のこととして中国の正史上では決着をみたことから、中国側の列島の交渉相手は同一の国であると理解できるからです。

つまり、中国側の列島の歴史に対する理解が深まり、同時期に2国が存在していたのではなく、既に列島には大和を都とする1国しかないことをようやく中国側が了解したと考えるのが妥当です。

また、18世紀に編纂された『明史』日本伝では唐の咸亨年間（670～674年）の初めに国名を日本と改めたと記されており、この時点でようやく中国側が日本への国名変更時期を確定させたのであり、『日本書紀』天武三年（674年）三月七日条では「對馬國司守忍海造大國言、銀始出于當國、即貢上。由是、大國授小錦下位。凡銀有倭國、初出于此時。」とあり、依然として倭国を称していることから、国名の正式な変更時期は、ほぼこの頃以降であったと解釈されます。

3. 倭、倭、日本の領域

『隋書』倭国伝、『旧唐書』倭国伝、『新唐書』日本伝共に国の領域は東西5ヵ月の行程、南北3ヵ月の行程としており、額面通りに受け取れば同じ国のことを言っており、名前が変わっただけです。

しかし、『旧唐書』日本伝だけは国土の大きさは疑わしいとしており、中国側が混乱していたように思われます。

4. 倭、倭、日本のルーツ

『隋書』倭国伝、『旧唐書』倭国伝、『新唐書』日本伝共に国のルーツは倭奴国としており、『旧唐書』日本伝だけが倭国の別種としています。

つまり中国側はルーツと国の領域は一体のものであると理解していたように思えます。

5. 阿每氏と倭、日本の記述内容

中国正史に見える阿每（天）氏と倭・日本の記述内容を講談社学術文庫の『倭国伝』を基に年代順に整理すると表のようになります。

当然のことながら中国側は列島の国王である阿每（天）氏に並々ならぬ興味があったようですが、『新唐書』が先行して日本の国名を採用しているのが特徴的です。

6. 『明史』の場合の冊封状況

明は1369年に略奪行為を行う倭寇を鎮圧するため、国書を使者楊載らから南朝の征西大將軍であった太宰府の懐良親王のもとに伝達し、懐良親王を「良懐」の名で「日本国王」に冊封しています。

なので足利義満は、当初は明国から「良懐と日本の国王位を争っている持明（北朝）の臣下」と看做されて、外交関係を結ぶ相手と認識されず苦勞したということです。

明の時代でも太宰府にいる人物が日本列島の王であるとの認識が抜けきっていない訳ですから、国名を倭から日本に変更する際には、中国側を納得させるのに相当な苦勞があったことは容易に想像されます。

西暦(年)	概 要	出典
—	三国時代の魏から南北朝の齊・梁の時代に至るまで、 倭 国王は代々中国と交渉があった。	隋書
—	国王の姓は 阿每 氏、初代国王・ 天 御中主から彦瀲まで筑紫城に住み、神武天皇の時に都を大和州に移した。	新唐書
600	開皇二十年に 倭 王・ 阿每 多利思比孤が隋に遣使した。	隋書
581～600	用明天皇（目多利思比孤）が隋の開皇末にはじめて中国と国交を通じた。	新唐書
581～600	隋の開皇年間に聖徳太子は使者を遣わし、海路中国に来て法華経を求めさせた。	宋史
607	倭 王・ 阿每 多利思比孤が隋に遣使した。	隋書
608	隋は裴世清を 倭 国に派遣した。	隋書
604～617	隋の煬帝の時に煬帝は使者を遣わして 日本 国の役人に錦綫冠を賜った。	新唐書
631	倭 国王の姓は 阿每 氏で、 倭 国王は使者を遣わしてその土地の産物を太宗に献上させた。	旧唐書
631	日本 国は使者を派遣して唐に入朝させた。	新唐書
648	倭 国王は太宗に上表文を届けた。	旧唐書
650～656	永徽年間の初め、 日本 国王の孝徳が即位し、改元して年号を白雉に改めた折に、琥珀とメノウを唐に献上してきた。 ほどなく、 日本 国では孝徳が死に、その子の 天 豊財（齊明天皇）が位を継いだ。	新唐書
670～674	唐の咸亨年間の初めに国名を 日本 と改めた。	明史

7. まとめ

以上の考察から、両国の交渉状況や中国側の理解を整理すると、次のような想定が成り立つのではないでしょうか。

(1) 中国側には倭奴国の後継国の都は筑紫城にあるとの認識が継続していたので、7世紀初頭の段階でも倭国側はあえて大和に都があるとは説明していなかった。

なので、国書の受取りも出先機関の大宰府で行っていた。

(2) 『旧唐書』が編纂される前の段階で倭から日本に国号を変更し、大和に都があることを中国側に伝えたが理解が得られず、また中国側は日本を倭奴国の正当な後継国とは了解できなかった。

従って、『旧唐書』では「倭国」と「日本」を併記することになった。

(3) 困った日本側は、神武天皇の時に都を筑紫城から大和州に移したというストーリーを作り、そのエビデンスとして『日本書紀』に神武東征の話を盛り込み、倭奴国の正当な後継国であることを主張した。

(4) 日本側のストーリーに納得した唐は、大和に都がある日本を倭奴国の正当な後継国と認め、『新唐書』にその旨を記述した。

前回の例会の話題

- ・天寿国曼荼羅繡帳の謎 一宮市 畑田寿一
- ・聖徳太子の日常 名古屋市 石田泉城

例会の予定

■ 例会の予定

- 1 日時 **8月13日(土) 13時半～**
- 2 場所 名古屋市市政資料館

■ 来月以降の例会

9/17(土), 10/15(土)

会員の投稿について

- 会報誌への投稿 (編集担当: 石田) toukaikodai@yahoo.co.jp

- 投稿締切り日 **8月27日(土)**

- 投稿文のテーマ

古代の青銅器などについて

サマーセミナーの感想

2022年7月18日(祝)に東邦高校にて公開講座を開催し、高校生を中心に37名の参加がありました。総じて好評の感想でした。

講座番号	K122	講座名	教科書が教えない!! 真実の古代史
氏名		学校名	1学年 15歳 男 西
講座を受けて聖徳太子についてくわしく知ることができました。教科書にのっていない太子の日常や太子の真偽について知ることができてよかったです。それに、聖徳太子の親の名前や妃の名前なども知ることができたのです。たねと思っていました。十七条の憲法や冠位十二階は教科書にのっていたけど、軽くやっていた十七条の憲法の内容までくわしくらべたので知ることができてよかったです。			

講座番号	K122	講座名	教科書が教えない!! 真実の古代史
氏名		学校名	2学年 17歳 男 女
今回の講演では「聖徳太子は存在するのだから」という長年議論されてきたテーマを中心に古代史の話を聞いた。聖徳太子の妃、橘大郎女が聖徳太子の行天國の姿を見た...という女官に作らせた天寿国曼荼羅繡帳の真偽についての話もあった。歴史の授業とは違、側面からの話が聞けて面白かった。第二部では聖徳太子の日常として聖徳太子の声の再現が興味深い話を聞いた。とても面白くて自分も勉強してみた...と思った。			

講座番号	K122	講座名	教科書が教えない!! 真実の古代史
氏名		学校名	3学年 17歳 男 女
今回、この講座を聞いて知ることができたことばかりだから次にできてよくて勉強になりました。最初、天寿国曼荼羅繡帳の話を知り、本当に人のこころが分かって、困惑していたんですけど、聞いていくと、一体これって人々の心の分かっていくとすごく聞いて面白かったです。他にも当時の日本の政治体制が、「聖徳太子と蘇我馬子の両統体制」という学校で学んだはずなのにすんなりおぼえていたし、同時期に逝去した膳部妃に対抗したという話なども面白かったです。次は聖徳太子の日常の話で、生まれたときから話すことになったことや、聖徳太子が依教を取られたことなど僕が知らなかったことがあってとてもびっくりしました。他にも、あの有名な「和さもって黄じする」の現代語訳が「まず、他人の話を聞いて」という事も知らなかったけれど本当に色んなことを学びました。ここには書ききれないほどたくさん僕が知らないことを学びました。ありがとうございました。これからもう活動が頑張ってください。			